

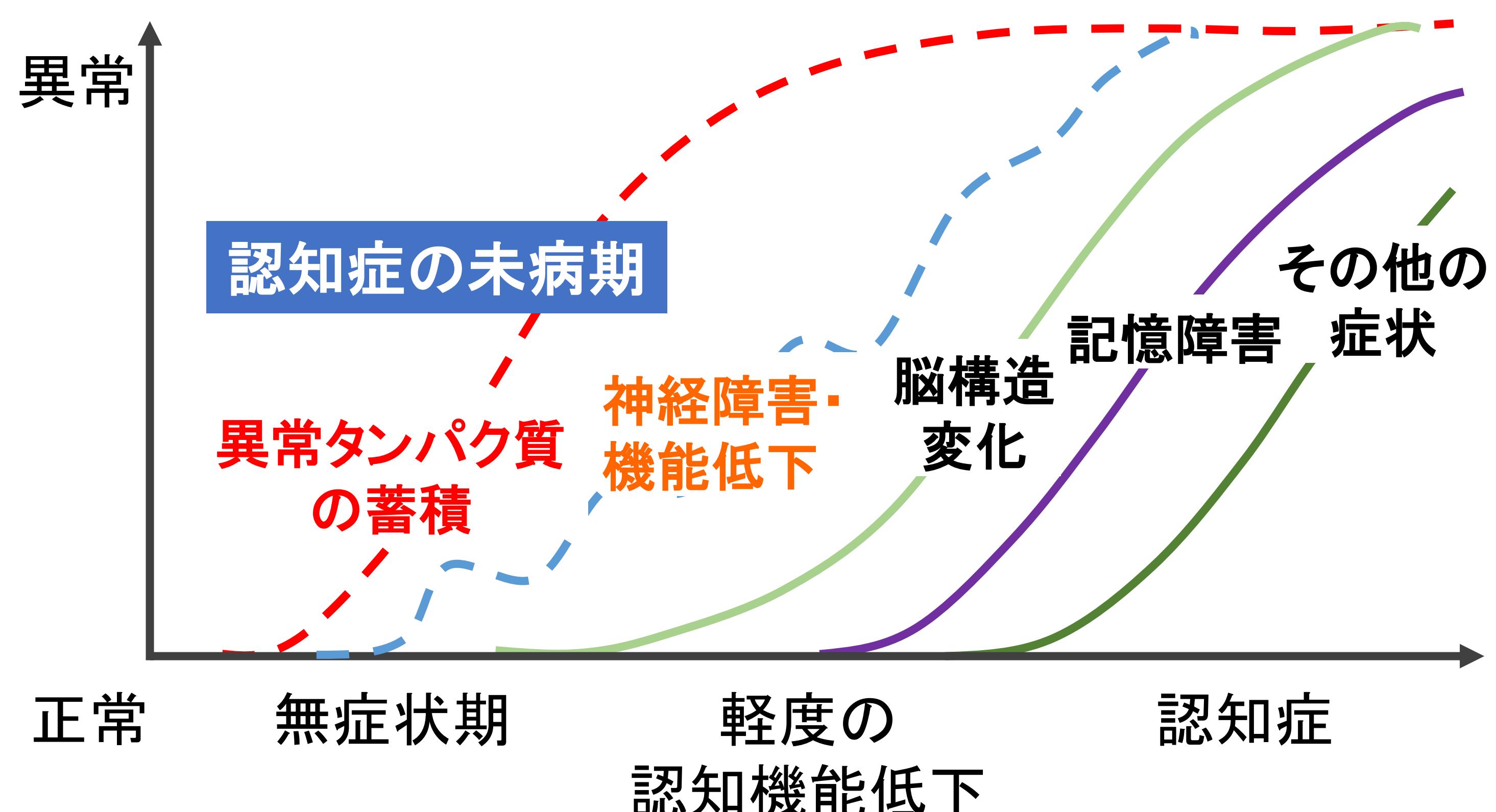
認知症、その未病の正体に迫る

京都大学大学院医学研究科 臨床神経学(脳神経内科)

石本智之、中村大和、菊谷明広、柳田成史、平藤哲也、錦織隆成、月田和人、田口智之、安田謙、眞木崇州、山門穂高、高橋良輔

はじめに：認知症とその未病について

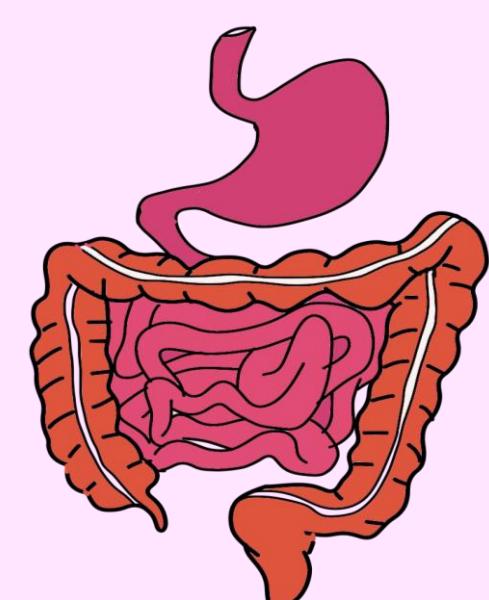
- 高齢化社会に伴い、2025年には65歳以上の5人に1人の割合で認知症を発症すると予想されています。
- 認知症をきたす主な要因であるアルツハイマー病、パーキンソン病関連疾患では、症状が出るよりずいぶん前から、異常タンパク質の蓄積が始まります（認知症の未病状態）。
- 未病の段階で対策することで、「認知症にならない」社会を目指して研究を行っています。



認知症は脳だけの病気ではない

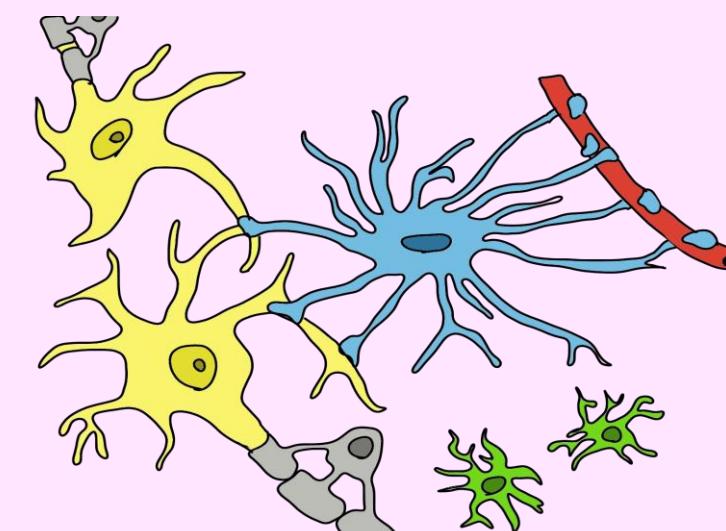
腸管

腸内細菌の変化



免疫系

糖尿病や炎症



感覚器

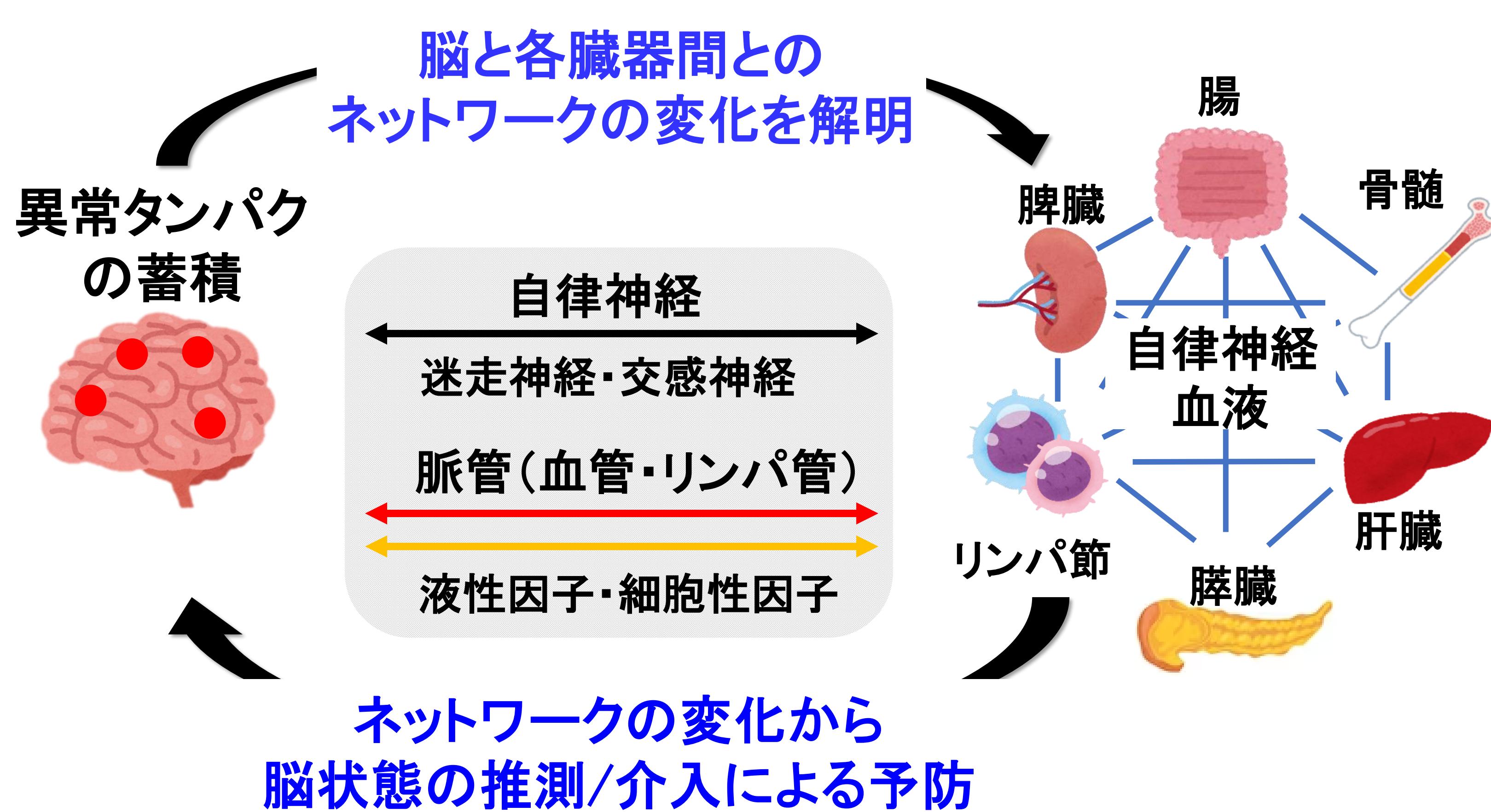


脳は神経ネットワークや血管を介して全身と繋がっている

認知症関連疾患の克服に向けて－「予防」を目指すには動物モデルが必要－

未病期から発症に至る

①脳と様々な臓器間のネットワークの変化を調べ、②発症を予測・予防できるポイントをさがす



① 脳はネットワーク臓器

ヒト由来iPS細胞だけでは、不十分

② 脳はヒトの人格に直結

ヒト細胞から脳を作るのは倫理的に許されない

③ 生体の各臓器のサンプルが必要

ヒトから多数得るのは不可能

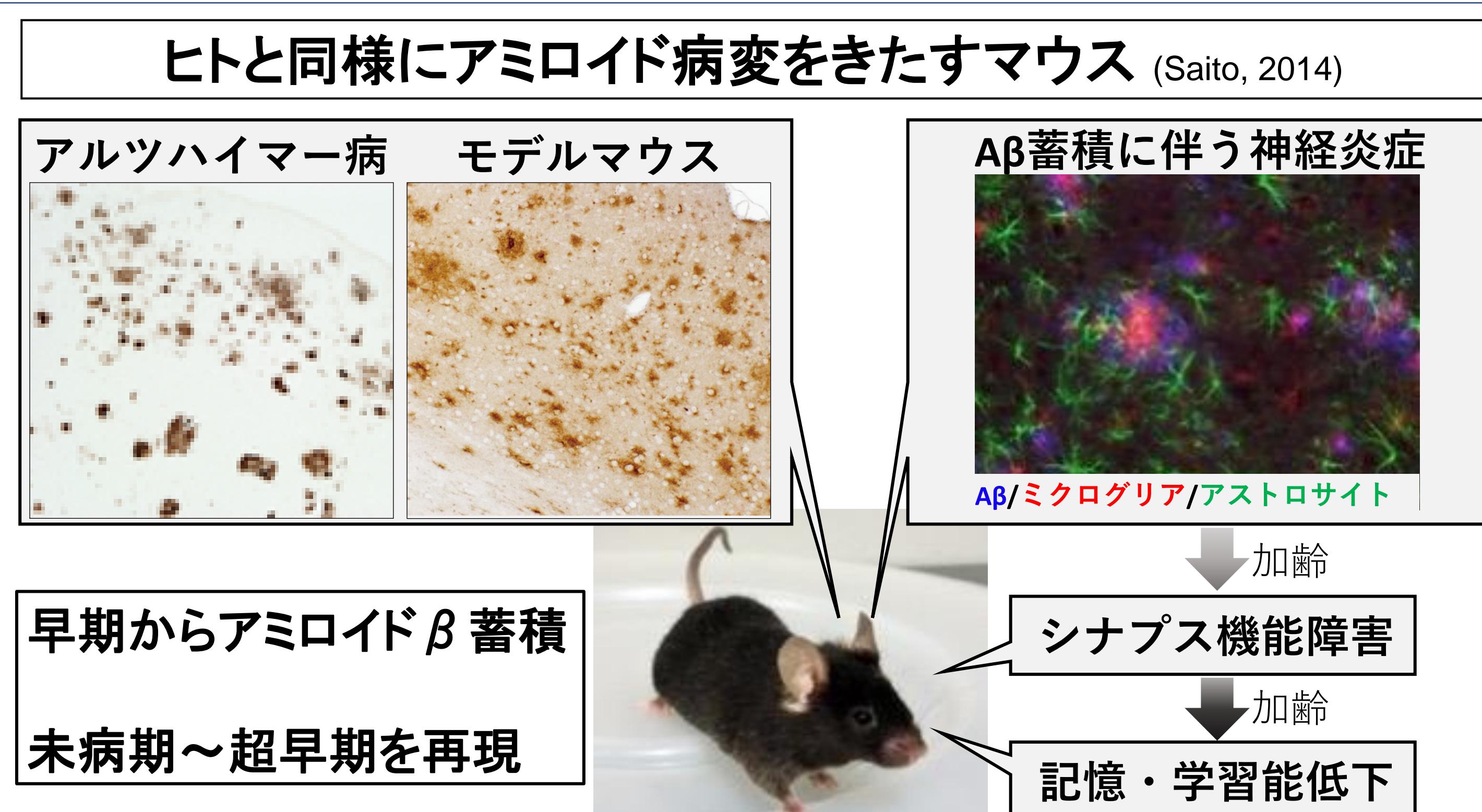
認知症の未病期を
再現する動物モデルが必要



対象としている認知症関連疾患と動物モデル

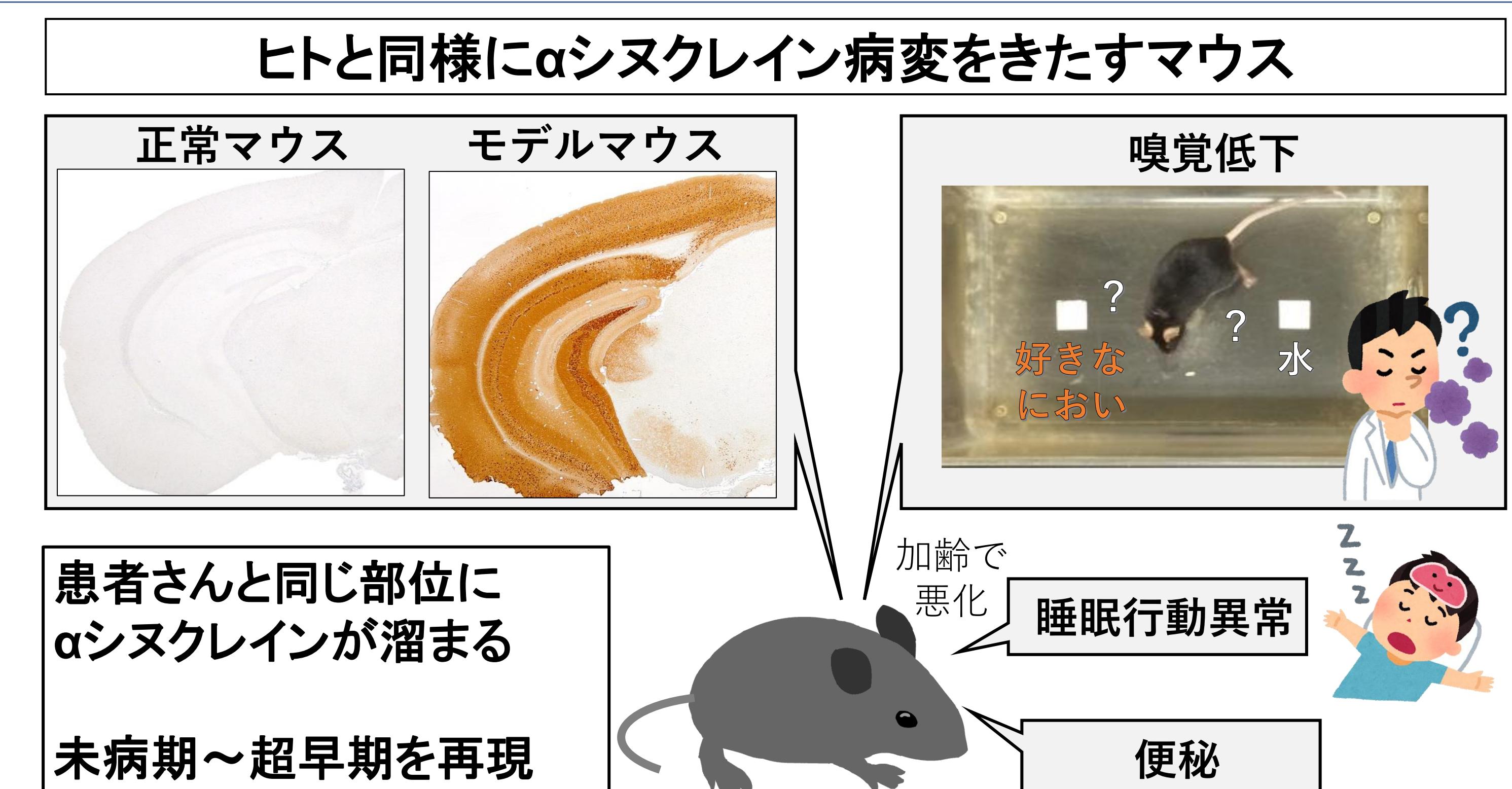
アルツハイマー病

- ・認知症をきたす疾患で最多（日本で400万人以上）
- ・「アミロイドベータ（ β ）」タンパク質が蓄積



パーキンソン病

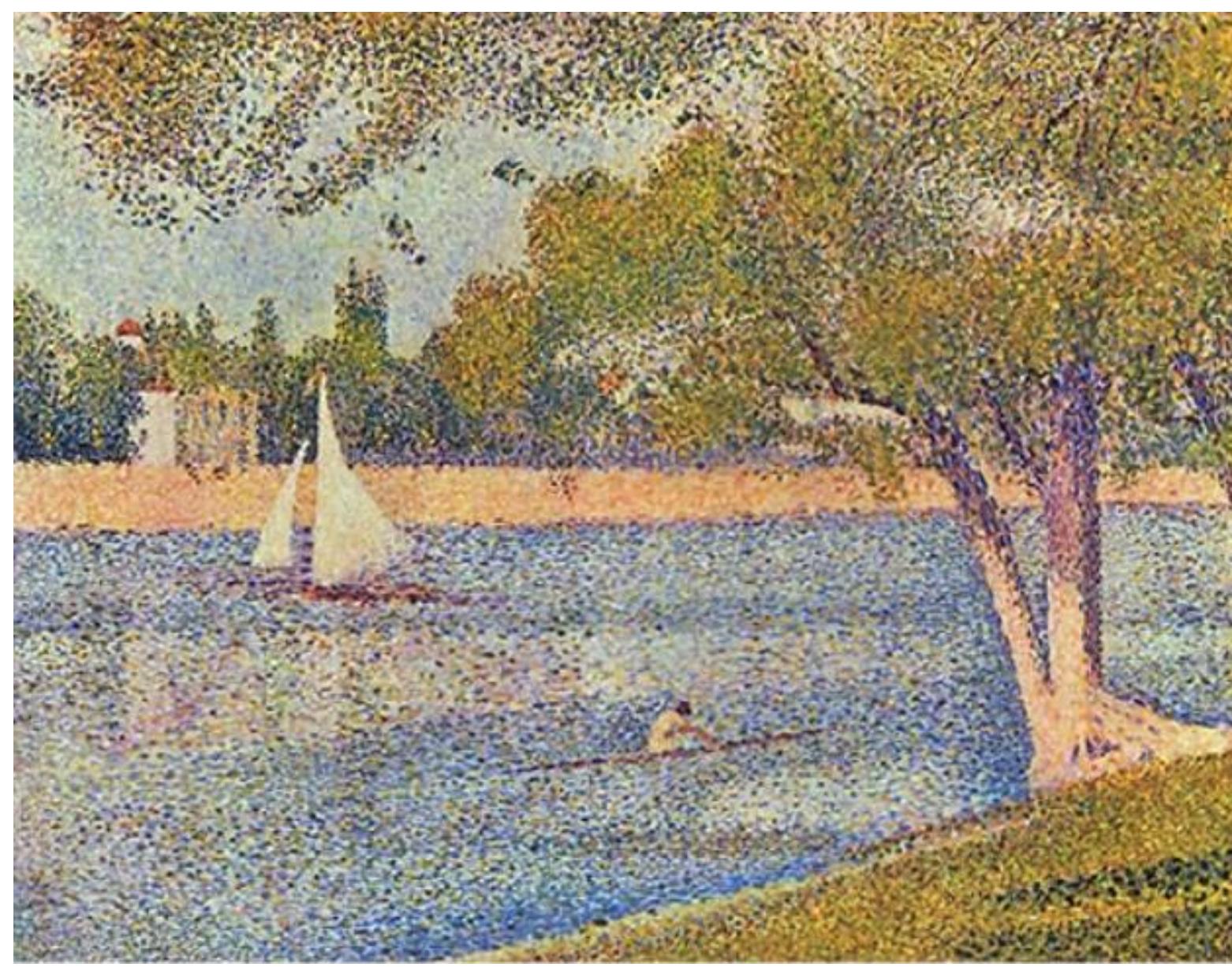
- ・体の動きが悪くなる神経難病。日本に20万人以上
- ・全身で「アルファ（ α ）シヌクレイン」タンパク質が蓄積



脳・臓器連関を中心とした未病状態と発症予見へのアプローチ

各臓器の細胞を一つ一つ単離して遺伝子を解析 ー未病期から発症に至る変化を追う！ー

19世紀フランスの画家
ジヨルジュ・スーの点描画



スー解析(細胞と遺伝子の点描画)

疾患モデルマウス

健常マウス

ここが
違う！

さらにこの部分を
取り出して
遺伝子X
の発現を調べる

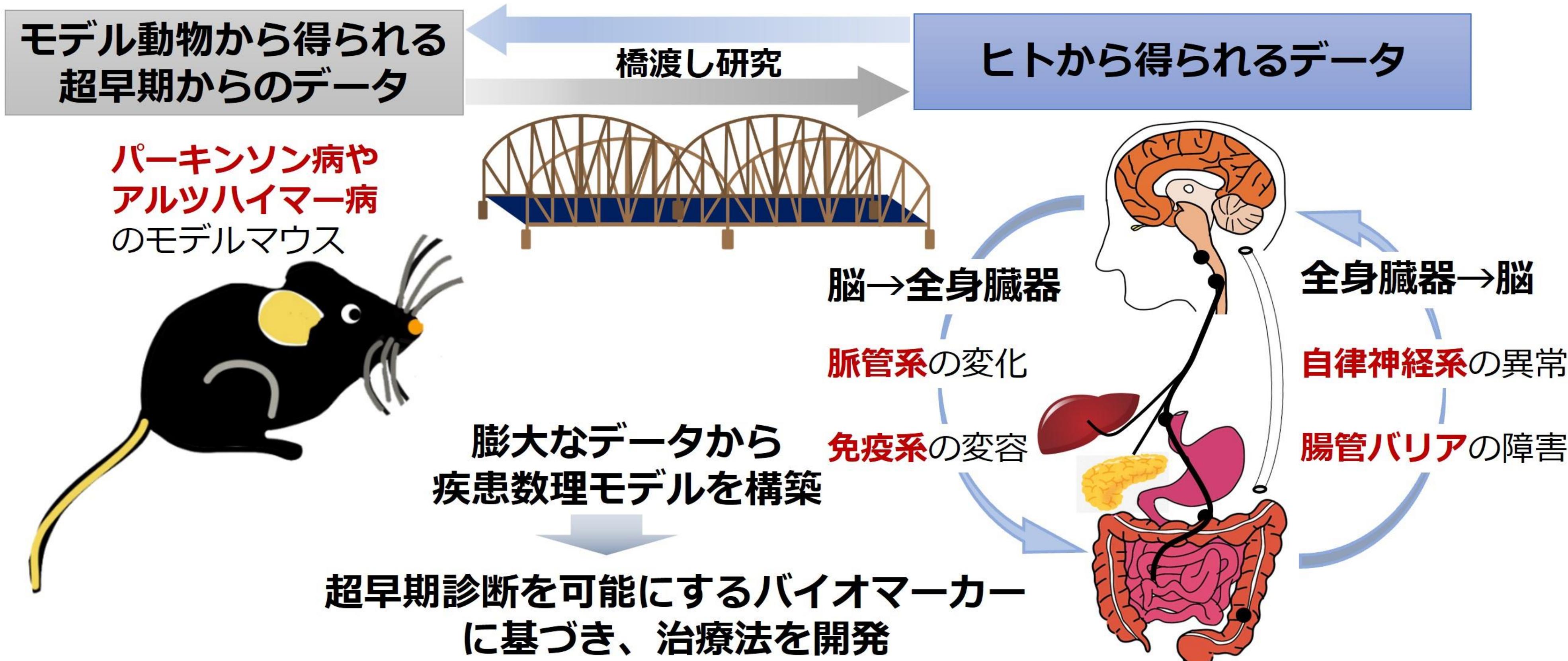
- 一つの点に1,000以上の遺伝子発現情報
- この図で約7万個の点

数万の細胞の、
数千の遺伝子発現を
一度に見る
= 数学・統計の力が必要

数理学的解析を駆使し、

- 臓器間ネットワークの初期変化を解明
- 負担の小さな検査での検出を目指す

動物モデルから得たデータをどう活用するか？ ー動物モデルとヒトでの「橋渡し研究」ー

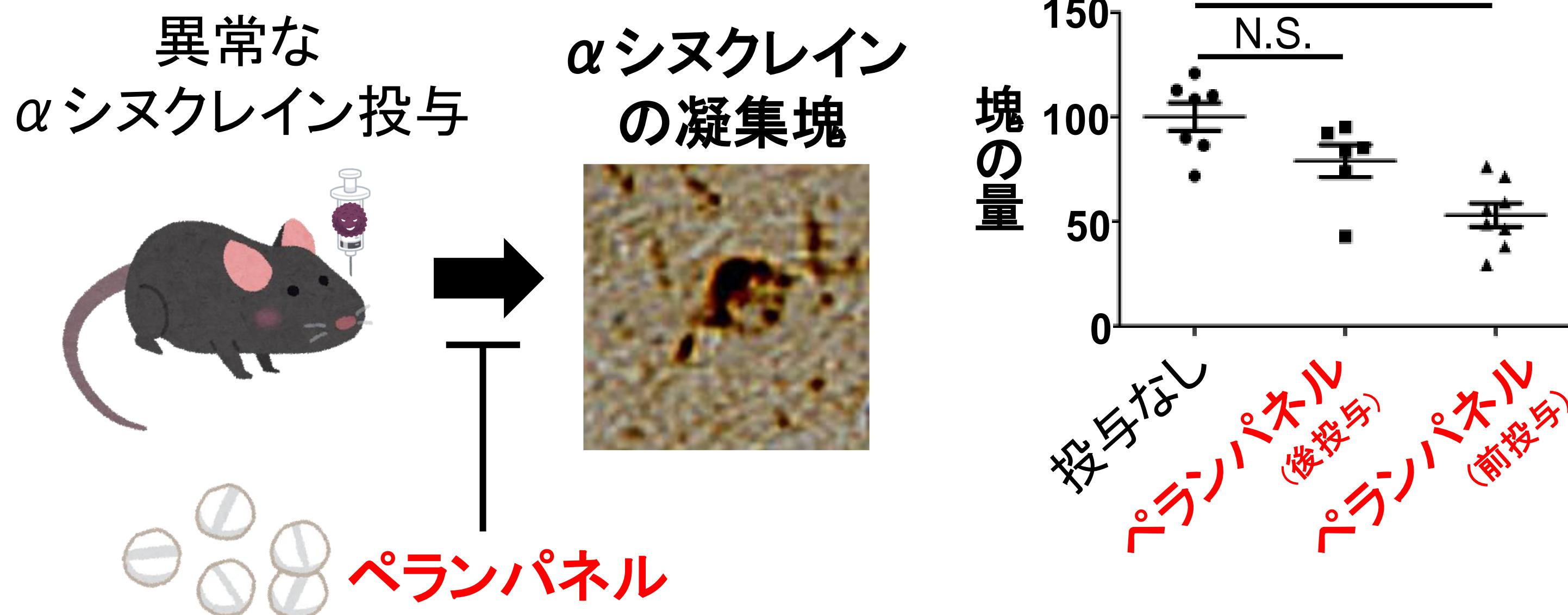


ヒトに関する集団研究との連携

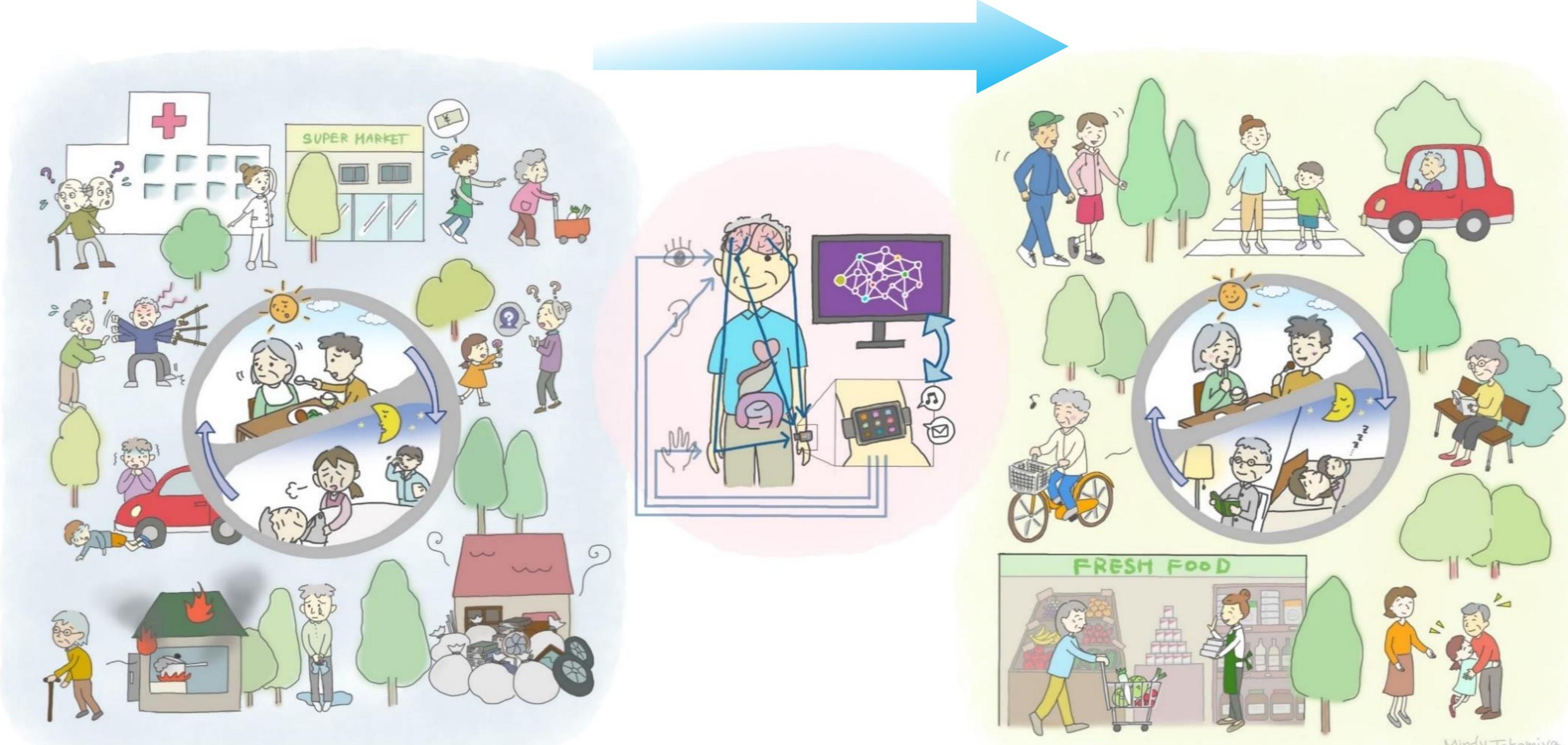
- ヒトの認知症「未病」集団研究: PET検査, MRI画像, 血液検体など
- 1万人を対象にした集団研究(長浜市)
健康情報, 血液, 尿, ゲノム, 生活習慣
- パーキンソン病に関する集団研究
- 1100万人強の英国バイオバンクも活用

発症や進行を遅らせる治療の開発(当科での成果の一例)、そして…

異常な α シヌクレインを投与して作る
パーキンソン病モデルマウスの α シヌクレインの量を
抗てんかん薬ペランパネルが減らす可能性を報告



目指すは、「認知症にならない」未来



動物実験の「3R」

Replacement (代替)	Reduction (削減)	Refinement (改善)
---------------------	-------------------	--------------------

動物実験について

我々は京都大学動物実験教育訓練を受け、動物実験委員会の承認を受けた実験計画でのみ、左記の3Rを考えながら実験動物を扱っています。

Grant/Research funding from:

Brain/MINDS from MEXT and AMED (15dm0207020, 15dm0207024 and 19dm0207070)

AMED (19ek0109310h0002)

JST (Moonshot R&D, JPMJMS2024)

